

みなみ はち まん い せき
南八幡遺跡 10

—南八幡遺跡第19次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1207集



1号住居出土銅鑄錫型

2013

福岡市教育委員会

みなみ はち まん い せき

南八幡遺跡 10

—南八幡遺跡第19次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1207集



調査番号 1120
遺跡略号 MHM-19

2013

福岡市教育委員会

題字は、福岡市東区青葉在住の松下さゆり氏の揮毫による

序

いにしえから大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、更なる発展を目指してさかんに都市開発が押し進められています。それに伴ってやもなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、JR九州鹿児島線と主要地方道大野城二丈線の交差する通称「相生踏切」歩道橋建設に先立って実施した南八幡遺跡第19次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代後期の堅穴住居から連鑄式銅鏡の鋳型が出土しました。青銅器鋳型の出土は、雑賀郡丘陵内の遺跡でははじめての発見です。奴国を中心域とされる須玖岡本遺跡周辺には青銅器やガラス製品の鋳造工房跡があり、生産供給する中核的集落と需要する衛星的集落としての南八幡遺跡を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会がJR九州南福岡駅北に位置する通称相生踏切の歩行者道の立体交差化に先立って、平成23(2011)年8月22日～9月16日までに福岡市博多区寿町2丁目1番地で緊急発掘調査した南八幡道路第19次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 道構は、建物跡をS.B.、豎穴住居跡をS.C.、土塙墓をS.R.、土塙をS.K.、ピットをS.P.と呼称して記号化し、その後にすべての道構を通番して01からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した道構と遺物の実図と製図は小林義彦があつたが、銅鑄錫型については田尻義了氏に依頼した。
5. 本書に掲載した道構と遺物の写真は小林が撮影した。また、調査区の全景および2号住居の全景写真は、C.G.で合成した。
6. 本書の執筆・編集は小林が行い、銅鑄錫型については田尻義了氏(九州大学埋蔵文化財調査室)の玉稿を頂いた。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号:1120	遺跡略号:MHM-19	分布地図番号:12-0051
調査地図:福岡市博多区寿町2丁目1番地		
工事面積: 80m ²	調査対象面積: 80m ²	調査実施面積: 113m ²
調査期間:2011年8月22日～9月16日		

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	8
1. 調査の概要	8
2. 壑穴住居	9
3. 掘立柱建物	13
4. 土 墓	16
5. 土 壇	16
III. おわりに	16
付論 南八幡遺跡第19次調査出土の銅鏡鋳型について	17

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)	2
Fig. 2 南八幡遺跡周辺遺跡位置図 (1 / 10,000)	4
Fig. 3 南八幡遺跡調査区位置図 (1 / 4,000)	5
Fig. 4 南八幡遺跡第19次調査区位置図 (1 / 1,000)	6
Fig. 5 南八幡遺跡第19次調査区現況図 (1 / 400)	7
Fig. 6 遺構配置図 (1 / 100)	8
Fig. 7 1号住居実測図 (1 / 60)	9
Fig. 8 1号住居出土遺物実測図1 (1 / 4)	10
Fig. 9 1号住居出土遺物実測図2 (1 / 1 · 1 / 2)	10
Fig. 10 2号住居実測図 (1 / 60)	11
Fig. 11 2号住居出土遺物実測図1 (1 / 2 · 1 / 4)	12
Fig. 12 2号住居出土遺物実測図2 (1 / 8)	13
Fig. 13 24 ~ 28号掘立柱建物実測図 (1 / 80)	14
Fig. 14 16号土壙墓実測図 (1 / 30)	15
Fig. 15 3号土壙実測図 (1 / 30)	15

表目次

Tab. 1	南八幡遺跡発掘調査一覧表	9
Tab. 2	掘立柱建物一覧表	13

図版目次

表 紙	1号住居出土銅鑄鋳型	
PL. 1 1)	調査区全景（東から）CG合成	2) 1・2号住居（東から）CG合成
PL. 2 1)	1号住居全景（北から）	2) 1号住居遺物出土状況（北から）
PL. 3 1)	2号住居全景（東から）CG合成	2) 2号住居遺物出土状況（南から）
PL. 4 1)	2号住居遺物出土状況（南から）	2) 掘立柱建物群（東から）
PL. 5 1)	16号土壙墓（南から）	2) 3号土壙（西から）
PL. 6	出土遺物（縮尺不同）	

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

南八幡遺跡は、春日市と境を接する福岡市の南端にあり、のどかな田園風景が広がる農村地帯であった。明治 22（1889）年に九州鉄道の雑駁隈駅が、更に大正 13（1924）年には西日本鉄道の雑駁隈駅も開設されて都市化が始まる。ところが、近年は鉄道沿線の副都心化による再開発が急速に進み、次第に高層ビルへと変わりつつある。

相生踏切と通称されるJR九州鹿児島線の踏切は、鉄道路線と主要地方道大野城二丈線が交差する交通量の多い踏切で、ラッシュ時の短い開扉時間帯には、人と車が擦違うように行き交う踏切であった。そこで車両のスマーズな通行と人々の安全な通行を図るために横断歩道橋の建設が、福岡市道路下水道局東部道路課を窓口として計画され、平成 22（2010）年 9 月 22 日付で教育委員会埋蔵文化財第 1 課へ事前審査依頼が提出された。

ところが、博多区寿町 1 丁目～2 丁目の南福岡駅周辺は南八幡遺跡として周知された埋蔵文化財包蔵地内にあり、周辺地での発掘調査事例からして弥生時代から古墳時代、奈良時代の集落が広がっていることが予想された。

そこで、2011（平成 23）年 2 月 23 日に確認調査を実施した。その結果、踏切の東側には春日市から続く丘陵が伸び、その丘陵上で土壌や柱穴が検出され、弥生時代から古墳時代の集落城が広がっていることが確認された。

遺跡は現状での保存が望ましいが、相生踏切の横断歩道橋建設は、交通量緩和と人の安全を図る喫緊の事業で、変更不可能なものであった。そこで、福岡市教育委員会埋蔵文化財第 2 課（当時）では発掘調査によって記録保存を図ることになった。発掘調査は、2011（平成 23）年 8 月 22 日より始め、9 月 16 日に無事終了した。

この間は、記録的な猛暑と頻繁に通過する列車の振動と騒音が入り混じった悪環境の中での発掘作業であり、作業に従事した方々の労苦に感謝する次第である。また、発掘調査中は、通行する市民の方々が多く見学され、市民の文化財保護への理解に資するところがあったと考える。

2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市道路下水道局東部道路課

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課（前埋蔵文化財第 2 課）

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

埋蔵文化財調査課第 1 係長 常松幹雄

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 古賀とも子（前埋蔵文化財第 1 課管理係）

調査担当 埋蔵文化財調査課第 1 係 小林義彦（前埋蔵文化財第 2 課第 1 係）

技能員 谷 直子

調査・整理作業 秋本君子 今村ひろ子 田中朋香 知花繁代 塚本よし子 土斐崎孝子 遠山歎

西田文子 松下さゆり 松下由希子 森田祐子

発掘調査にあたっては、事前に幾度もの協議を重ねて発掘調査の準備と調査環境の整備に当たられた福岡市道路下水道局東部道路課の担当者や埋蔵文化財課各位の協力と配慮に感謝します。また、出土した銅鏡鋳型の整理報告では、田尻義了氏（九州大学埋蔵文化財調査室）に指導と助言を受けた。

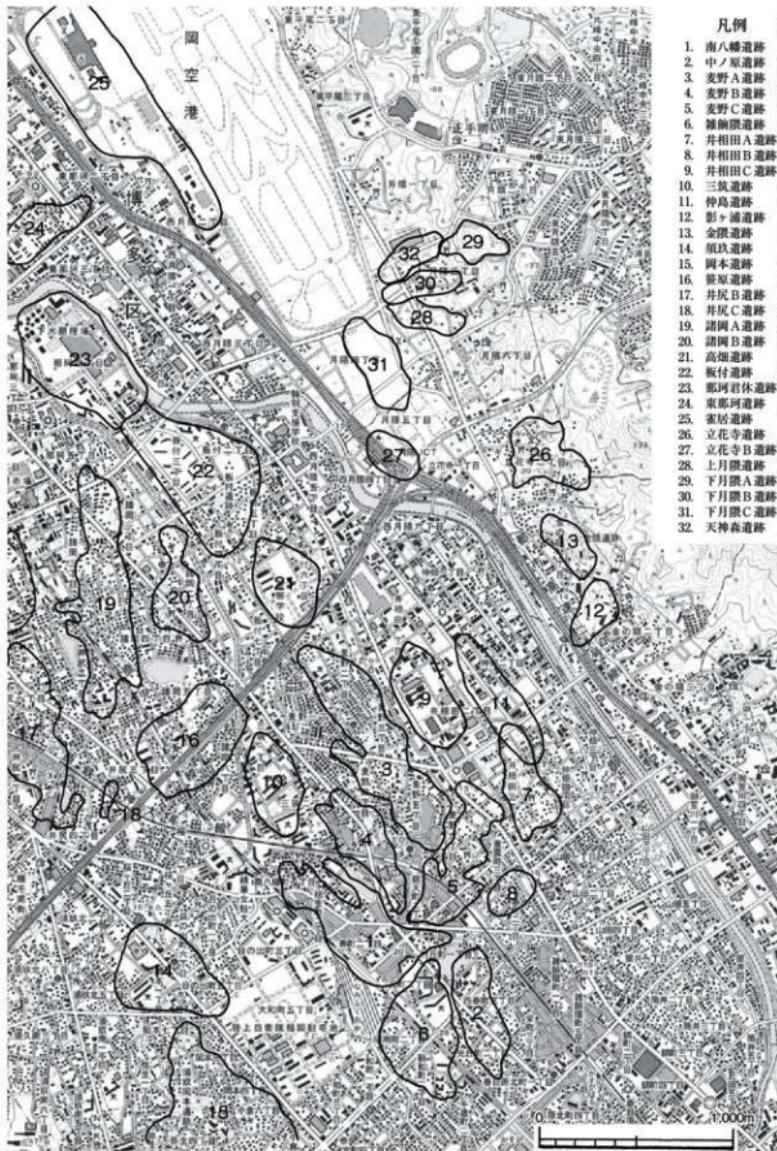


Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

3. 立地と歴史的環境

南八幡遺跡は、古くから雑餉と総称される雑餉隈にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市のもっとも南端にある。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地している。春日丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周縁には青銅器製造工房跡の須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡が展開している。雑餉隈丘陵は、春日丘陵から北東へ1kmの距離にある。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤層とし、諸岡川などの開析による谷が筋状も彎入して幾つかの小さな低丘陵を形成している。この雑餉隈の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して麦野A・B・C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡と呼んでいる。

この雑餉隈丘陵の西北縁に北西から南東に長く延びる南八幡遺跡は、東を麦野B・C遺跡と南は雑餉隈遺跡との間に開析谷が細長く彎入して丘陵を画している。この雑餉隈丘陵でもっとも古い遺物は、旧石器時代の石刃やナイフ形石器が麦野A 1次調査や雑餉隈5・10次調査区、南八幡12次調査区で出土しており、散漫ながら台地状の広い範囲に拡がっていることが明らかになりつつある。

次に、縄文時代の遺構は稀薄である。麦野B 3次調査区や南八幡6次調査区、中ノ原5次調査区などで「落とし穴」と推察される土壙が検出されているが、出土遺物が少なく時期は明確ではない。

弥生時代になると、一転して遺構は広範囲に拡がりを見せる。前期は雑餉隈丘陵南端の雑餉隈5次調査区で、円形住居と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落であった可能性が考えられる。中期は、麦野C遺跡で方形住居が検出されている。後期には、雑餉隈5次調査区や南八幡5・9次調査区で住居や掘立柱建物群が検出されている。雑餉隈丘陵では、南縁の三つの丘陵上で比較的小規模な集落が点的に営まれたものと思われる。一方で、墳墓域は麦野C 5次調査区や南八幡17次調査区で壇柏墓が単発的に検出されたのみで集落域に伴う墳墓域は明確ではない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になる。殊に、前期から中期の遺構や遺物はほとんどなくなる。後期には、南八幡2・3次調査区で竪穴住居が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測されるが、奈良時代の大規模な集落跡との関連については明らかではない。

奈良時代になると、掘立柱建物群を伴う大規模な集落域が出現する。7世紀末から8世紀初めには、雑餉隈9次調査区で方形に配置された大型の建物群が出現する。その規模と配置は、官衙的な性格を想起させる。更に、8世紀前半から後半になると丘陵の全域に亘って集落域が展開する。雑餉隈遺跡5次調査区で50棟を超す住居が、また近接する麦野C 1・5・13調査区では100棟にのぼる住居群が検出されている。住居は、数回に亘って建替えられており、長期的に集落が展開していたと推測され、丘陵毎に多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における撲点集落的な様相を想起させる。あたかも「雑餉隈」の名が、大宰府官人の雑餉の居住地や食糧倉庫が建ち並んだ所とする古説に符合するようである。

なお、平安時代の初めには集落域は急速に縮小する。麦野A 3次調査区で井戸跡が検出され、中世になると集落の中心域が雑餉隈丘陵から麦野丘陵へと移行する様子が窺がえる。

南八幡遺跡では、12次調査区で旧石器時代の遺物が、6次調査区で縄文時代の落し穴が検出されているが、きわめて稀薄な分布である。弥生時代になると一転して集落域が拡がる。9・12・19次調査区で掘立柱建物群を作り住居が展開し、次の古墳時代から奈良時代には集落域は前時代以上に拡がり、雑餉隈丘陵の遺跡展開と軌を一にする。1～7・9・11・12・15次調査区で住居が検出されている。概観的には、麦野丘陵では丘陵毎に集落域が展開し、それが連携しながら展開していたことが窺がえる。

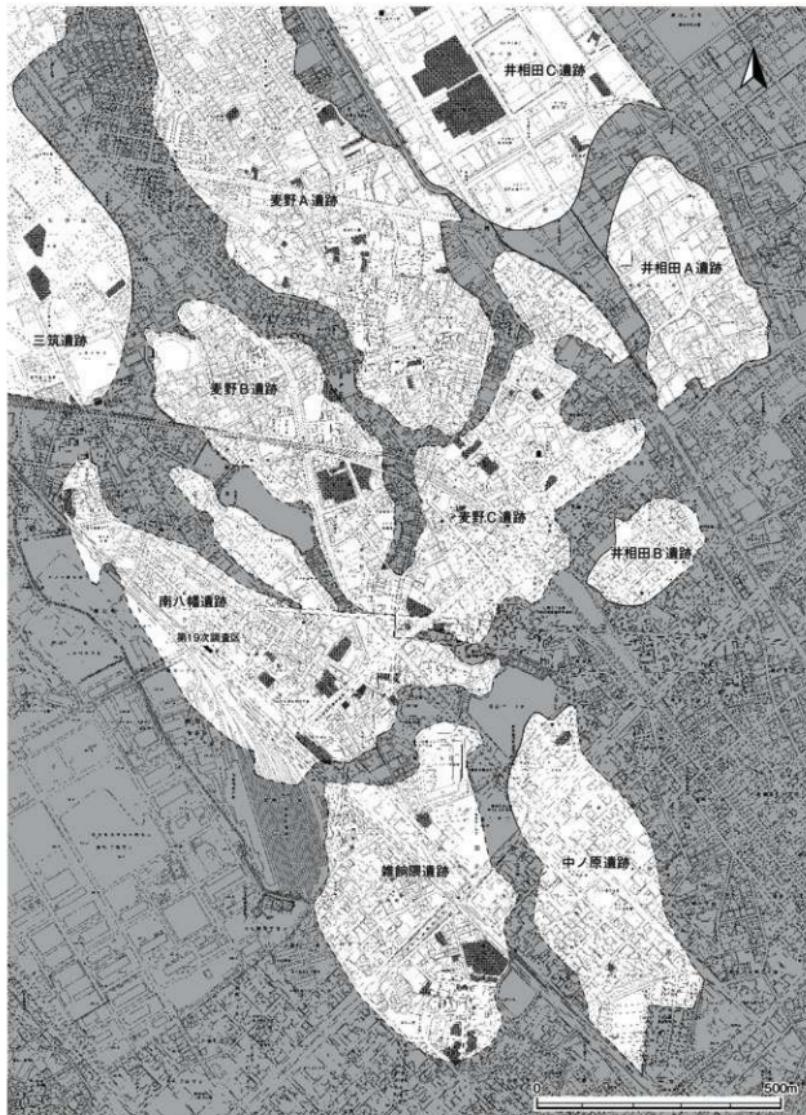


Fig.2 南八幡遺跡周辺遺跡位置図 (1/10,000)

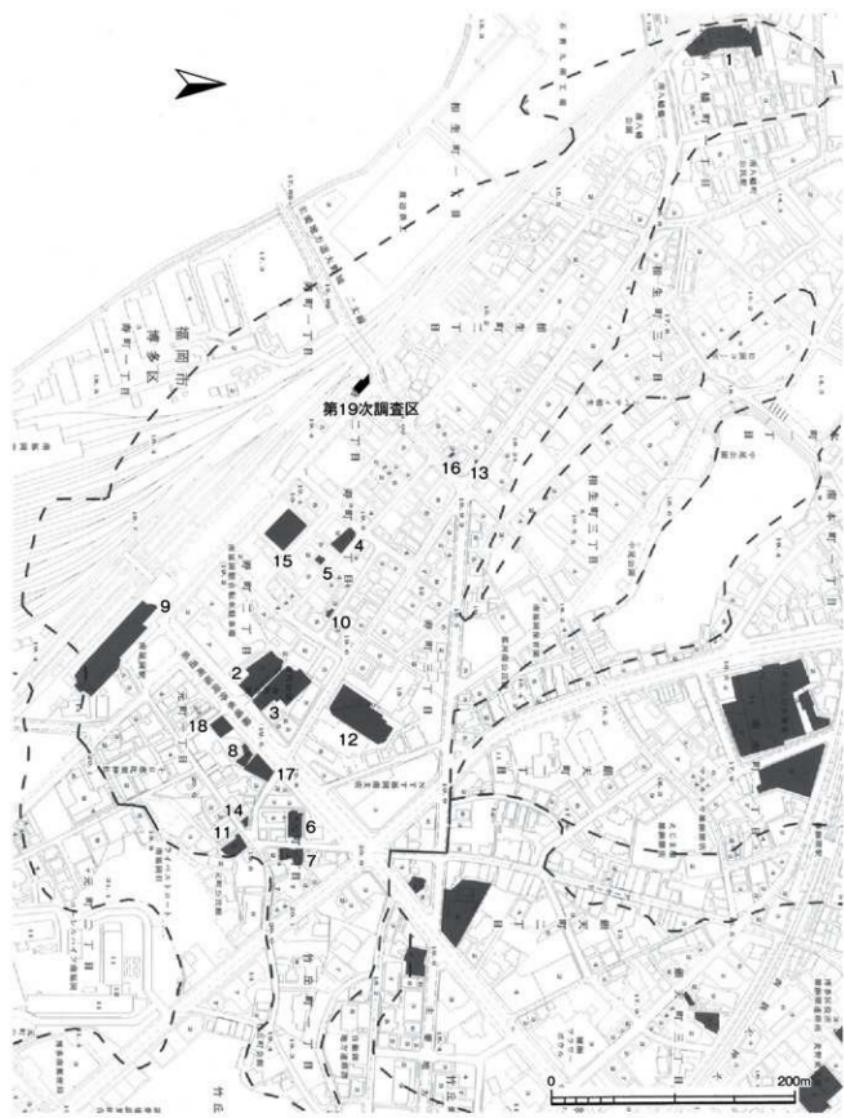


Fig.3 南八幡遺跡調査区位置図(1/4,000)

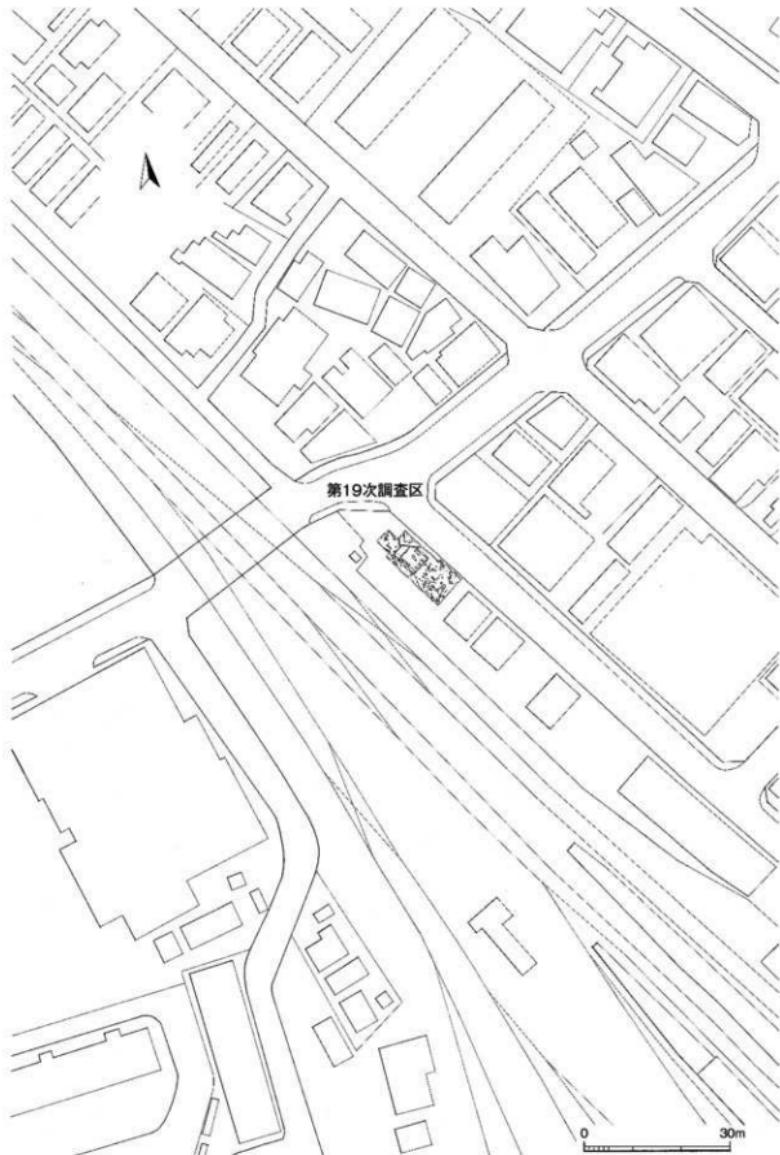


Fig.4 南八幡遺跡第19次調査区位置図(1/1,000)

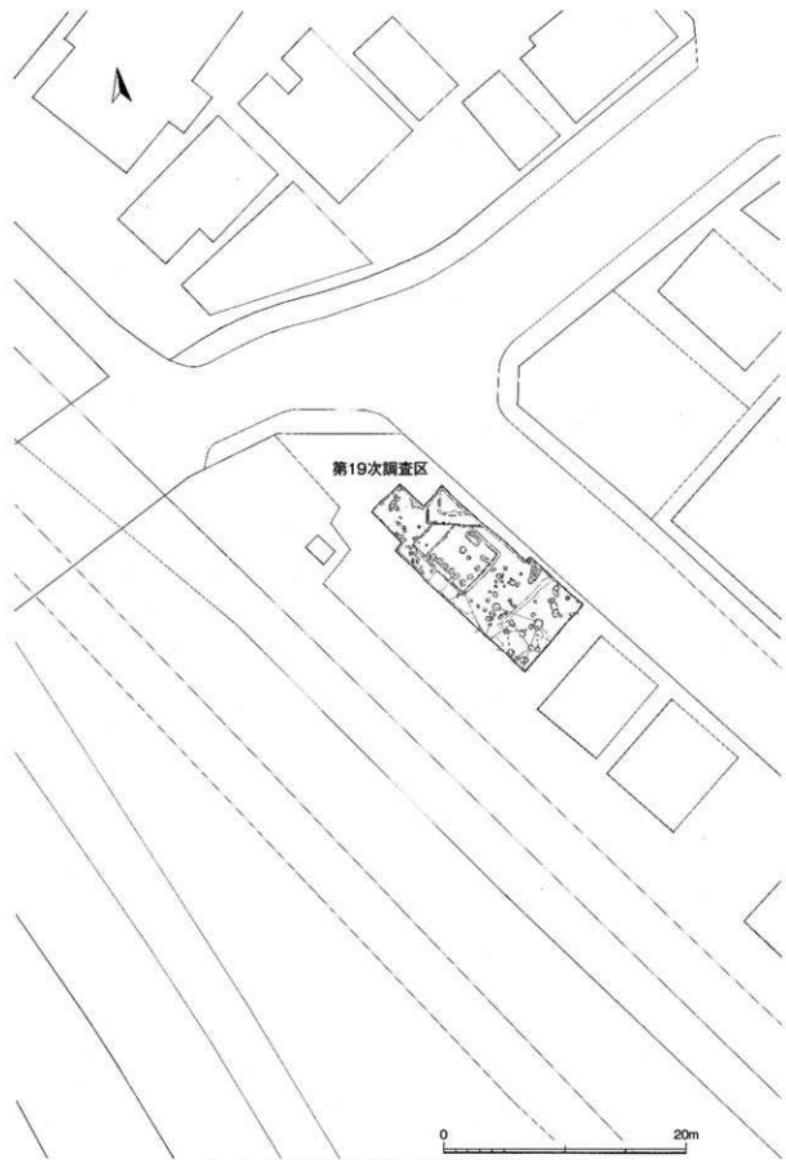


Fig.5 南八幡遺跡第19次調査区現況図(1/400)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

南八幡遺跡は、御笠川西岸の南北にのびる雑餉隈丘陵上にある。この雑餉隈丘陵は、縛入する開析谷によって六つの低丘陵に分かれ、その丘陵は南から中ノ原、雑餉隈、南八幡、麦野C、麦野B、麦野Aの遺跡群が占地している。南八幡遺跡は、雑餉隈丘陵群の南西縁に位置する南北が900m、東西が400mの南北に長く延びる標高が20mの低丘陵で、その北端は、北西から開析谷が450mほど縛入して丘陵を大きく二分している。かつてはこの開析谷や各丘陵間の谷々には農業用水池が築かれていた。

第19次調査区は、この南八幡丘陵の西縁に立地し、春日市との境をなす南側には大きな開析谷が縛入しており、須玖岡本遺跡を核とする春日丘陵の遺跡群と対峙している。南八幡遺跡では、これまでに18地点で発掘調査が実施され、周辺には弥生時代から古墳、奈良時代の集落跡が比較的広い範囲に拡がっていることが明らかになっている。試掘調査では、弥生土器を伴う溝状遺構とピットが検出され、70mほど南にある5・15次調査区では、弥生時代と奈良時代の竪穴住居が検出されていることから該期の集落域が拡がっているものと予想された。

発掘調査は、平成23(2011)年8月22日の表土層の剥ぎ取り作業から開始した。調査区は、JR九州鹿児島線の鉄道線路と大野城二丈線に面しており、数分間隔での列車の通過や行き交う自動車の騒音や振動で調査の進捗に支障が生じた。また、調査区の狭小さから排土処理には苦心し、結果的に排土を三転する仕儀に至った。しかしながら、狭小な調査区にも拘らず、弥生時代後期の住居や5棟の掘立柱建物を検出した。殊に、1号住居からは雑餉隈丘陵ではじめてとなる青銅器の鋳型を検出し、大きな成果を挙げて9月16日に排土を埋め戻して記録保存調査を終えた。調査は、連日35℃を超す猛暑の中で行なわれた。改めて作業員諸氏の労苦に感謝します。

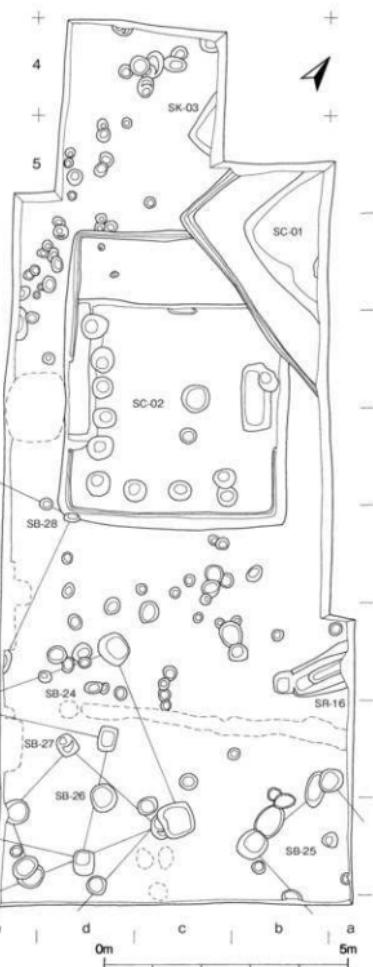


Fig.6 遺構配置図(1/100)

2. 壺穴住居 (S C)

壺穴住居は、2棟を検出した。調査区は、丘陵が西へむかって緩やかに傾斜を始める丘陵の縁辺にあたり、分布的には四方にむかって住居群が拡がっている可能性が想起される。

壺穴住居は、いずれも方形の平面プランを呈するもので、壁下にはコ字形かL字形のベッド状遺構を配し、床面は黄褐色粘土を貼って貼床を作り出して床面の均衡を図っている。

1号住居 SC - 01 (Fig.7 PL. 1・2)

1号住居は、調査区の北端部に位置する壺穴住居で、南壁は2号住居の北隔壁を削平している。平面形は、南壁と西壁の一部を除いて調査区外に拡がっているが、一辺が5~6mの方形プランをなす。壁際には、黄褐色粘土ブロックを硬く敷き固めた幅が60~80cm、厚さが10cm余のベッド状の遺構があり、L字状あるいはコ字状に巡っているものと推測される。このベッド状遺構の壁際には幅

Tab. 1 南八幡遺跡発掘調査一覧表

次 次 調査 番号	所 在 地	調 査 期 間	調 査 面 積 (af)	報告書	時 代	概 要	主な遺物
0 193201	柏町1丁目24	19320100 ~ 19320315	86.0				
1 7937	南八幡2丁目85	19791012 ~ 19791110	680.0	488	古墳時代	溝	土器
2 8413	寿町2丁目1191	19841017 ~ 19841215	800.0	128	古墳~奈良時代	壺穴住居・掘立柱建物・土塼	土器・須恵器
3 8652	寿町2丁目1191番外	19861216 ~ 19870405	1600.0	181	古墳~奈良時代	壺穴住居・掘立柱建物	土器・須恵器・石器・鉄器
4 9112	寿町2丁目86-12	19910107 ~ 19910615	247.0	277	奈良時代	壺穴住居・掘立柱建物	
5 9432	寿町2丁目84B51	19941201 ~ 19941228	56.0	441	奈良時代	壺穴住居	弥生土器・砾石
6 9508	元町1丁目194	19950512 ~ 19950515	206.0	501	織文・奈良時代	落とし穴・壺穴住居・土塼	土器・須恵器
7 9560	元町1丁目201	19960304 ~ 19960318	200.0	528	奈良時代	壺穴住居・土塼	土器・須恵器
8 9707	元町1丁目118-485	19970409 ~ 19970426	230.0	602	古代	掘立柱建物・井戸・土塼・溝	土器・須恵器・礫・瓦
9 9814	寿町1丁目	19980514 ~ 19980828	1,732.0	641	弥生・奈良時代	壺穴住居・土塼・掘立柱建物	弥生土器・土器・須恵器・石器・鉄器
10 0040	寿町2丁目63	20000925 ~ 20000930	75.0	年鑑 VOL.15	近代	溝	鐵器
11 0228	元町1丁目29-15	20020801 ~ 20020823	170.0	825	奈良時代	壺穴住居・掘立柱建物・溝	土器・須恵器
12 0403	寿町3丁目28-1	20040401 ~ 20040615	1,253.0	906	田石器・弥生時代	壺穴住居	ナイフ形石器・台形石器・弥生土器
13 0465	柏町2丁目28	20041122 ~ 20041122	6.6	年鑑 VOL.15	奈良時代	柱穴	土器
14 0520	元町1丁目17	20050530 ~ 20050603	90.0	年鑑 VOL.20	古代~近代	柱穴・溝	須恵器・白磁
15 0630	寿町2丁目97	20060710 ~ 20060929	289.0	1007	弥生・奈良時代	壺穴住居・溝・土塼	三種尖頭器・土器・須恵器
16 0837	柏町2丁目30	20080901 ~ 20080908	51.6	年鑑 VOL.23	古代	壺穴住居・柱穴	土器・須恵器
17 0926	元町1丁目71の一部	20091008 ~ 20091112	139.2	1171	弥生・奈良時代	窓枠・柱穴	窓枠・土器・須恵器
18 1044	元町1丁目71	20110301 ~ 20110304	148.0	年鑑 VOL.25	古代	ピット	土器・須恵器
19 1120	寿町2丁目	20110822 ~ 20110916	113.0	本報告書	弥生時代	壺穴住居・掘立柱建物・土塼	弥生土器・管玉・銅鏡鋏型

が7~12cm、深さが9~11cmの周溝が巡っている。ベッド状遺構下の床面は、中央部が浅い凹レンズ状をなし、良く踏み固められている。検出面からの深さは、ベッド状遺構までが30~35cm、床面までが45cmである。主柱穴は判然としないが、北西隅壁際に径が35cm、深さが25cm余のピットがあり、壁隅に柱穴を配した4本柱の可能性が考えられる。遺物は、南壁際に壺や鉢、甕片が比較的まとまって出土したほか、床面上から碧玉製管玉と銅鏡の鋳型片1点が出土した。

出土遺物(Fig. 8・9 PL. 6)1は丸底壺の胴部下半で、現高は16.1cmある。胴部はラグビーボール状の長臘形をなす。調整は、内底面が指頭押圧、胴部は凹凸の著しい指頭押圧後にナデ上げ調整。外面は押圧ナデで、2次被熱による赤変があり、一部にはスス様の黒色物が付着している。胎土は粗く、細~石英粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は、内外面ともくすんだ淡黄褐色。2は口径が11.6cm、現高が6.4cmの台付鉢である。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部はストレートに短く直口する。器面の磨滅が著しいが、口縁部内面はナデ後に細かいハケ目。外面はナデ。胎土は、良質で微細~小砂粒と雲母微細を比較的多く含む。色調は、内面が淡黄橙色、外面は淡黄橙~明赤橙色。3は底径が14.8cmの台付壺の脚部である。短い脚部は朝顔状に大きく外反する。調整は内外面共に目幅が1mm弱のやや細かいハケ目調整で、壺底部との境は強い指頭押圧を加えて接合している。胎土はやや粗く、多量の細~石英粗砂粒と僅少の赤褐色粒を含む。色調はくすんだ黄灰色。

4は石英斑岩製の長さが5.1cm、幅が3.7cm、厚さが2cmの銅鏡鋳型片である。銅鏡は、表面に2本を連ねた連鉄式、裏面は1本を各々上下逆にして表裏2面に彫り込んでいる。銅鏡の形状は三角形鏡で、茎長は1.6cm、鏡身は2.7cmに復原される。側面には合印が刻まれている。

5は碧玉製管玉である。長さは1.42~1.43cmで、直径は0.55cmであるが中央部は0.59cmとやや太くなる。円孔径は約2mmで上下両面から穿ち、中央部はやや細くなっている。

2号住居跡 S C - 02 (Fig. 10 PL. 3・4)

2号住居は、調査区中央部の丘陵上に立地し、北隅壁は1号住居の南壁に、また西壁の一部は搅乱

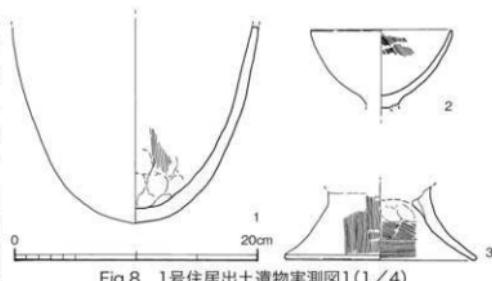


Fig. 8 1号住居出土遺物実測図1(1/4)

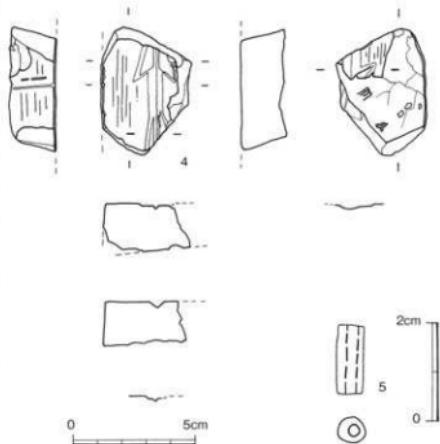


Fig. 9 1号住居出土遺物実測図2(1/1・1/2)

によって削平されている。平面形は東西長が4.7m、南北長6.0mの長方形プランを呈する。北壁下には幅が13cmの短冊状のベッド状遺構がローム面を削り出して造り付けられている。床面からの高さは25~30cmである。また、西壁下の床面上には鳥栖ロームブロックを敷き固めた幅が40cm、長さが270cm、高さが5~10cmの小さなベッド状の高まりがある。床面は、3~5cmの鳥栖ロームブロックを敷き詰めて貼床としており、中央には直径が56cm、深さ15cmの炉跡がある。炉跡の壁面は薄く赤変し、覆土には多くの炭片が混入していた。床面上には、直径が45~50cm、深さが10~30cmの柱穴が西壁下で6本、南壁下で4本、東壁下には1本が並んで掘り込まれており、主柱穴は明らかではない。また、東壁下には柱穴に切られた短軸長が60cm、長軸長が140cm、深さが36cmの長方形プランの土壙がある。東西壁の一部を除いて壁下には幅8~10cm、深さが6~10cmの周溝が巡っている。遺物は、甕や鉢が出土したほか、炉跡を挟んだ床面上からは甕棺に用いる大型甕片が焼けた板片と共に出土したが、これは住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 11・12 PL. 6)
6は口径が9cmの丹塗壺である。口縁部は、屈曲して短く外反する頸部から小さく袋状気味に内傾して立ち上がる。調整は、口頸部内外面がヨコナデ、胴部はハケ目で外面には丹彩痕が残る。胎土は良質で、微細~小砂粒を比較的多く含み、焼成は良好。7は口径が13.6cmの直口壺で、口縁部は緩やかに外反し、端部は小さく内外に掘み出して平坦に仕上げている。調整は、

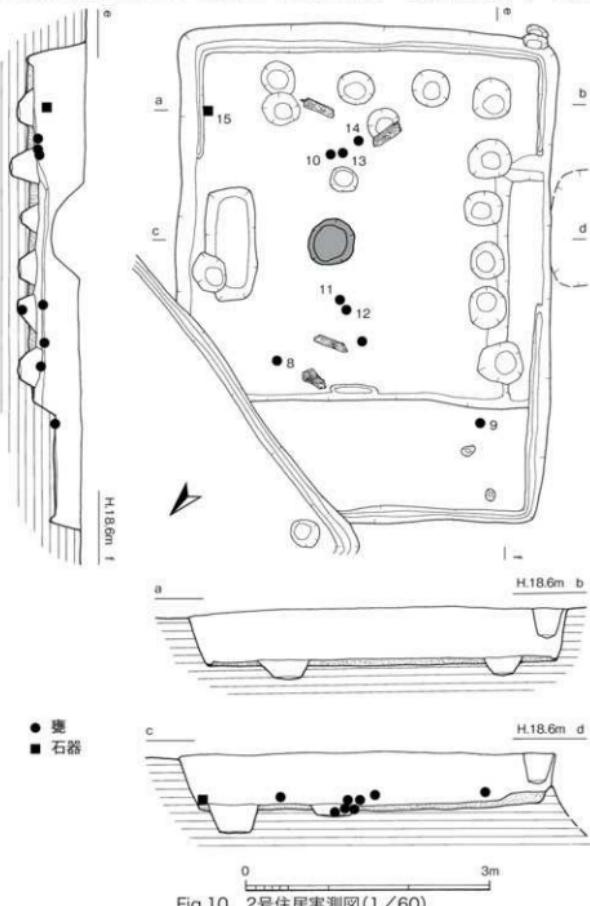


Fig. 10 2号住居実測図(1/60)

磨滅が著しいが倒卵形をなす胴部内面は指頭押圧ナデ、外面はナデ。胎土は、やや粗く細～石英粗砂粒を多く含む他に赤褐色粒を含む。明橙色。8～10は小型の甕である。8は口径が13cm、底径5.2cm、器高が13.2cm。やや肉厚の口縁部は短く外反し、胴部は緩やかな球形をなす。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内面が指頭押圧ナデ、外面はハケ目後にナデ。胎土はやや粗く、多くの微細～中砂粒と僅少の雲母微細を含み、焼成は良好。色調は、ややくすんだ赤褐色。9は口径が16.9cm、底径が6.2cm、器高が16cm。口縁部は緩やかに外反する。調整は、口縁部がヨコナデで、内面にはヨコハケ目が残る。胴部は押圧ナデ後にやや粗いタテハケ目で外面には炭化物様の黒色物が付着している。胎土はやや粗く、微細～石英砂を多く含む他に少量の赤褐色粒や雲母微細を含む。色調は、淡黄橙色～明赤橙色。10は口径が16.8cm。短く外反する口縁部は内面に比較的シャープな稜を作る。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は押圧ナデ後に粗いタテハケ目。胎土はやや粗く、微細～小砂粒を多く含む他に少量の赤褐色粒と雲母を含む。赤橙色。11は口径が22.6cmの甕である。口縁部は短く「く」字状に外反し、

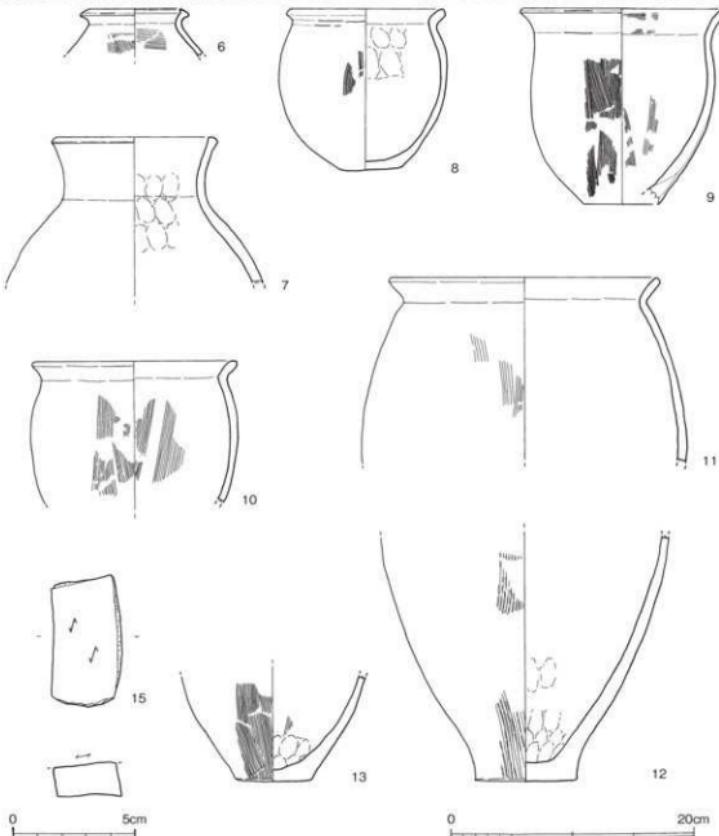


Fig.11 2号住居出土遺物実測図1(1/2・1/4)

胴部は倒卵形をなす。器面の磨滅が著しいが胴部内面は押圧ナデ、外面はハケ目調整で2次被熱による赤変と煤様の黒色物が付着している。胎土は粗く、微細～石英中砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は外面が赤橙色、内面は黄橙色。12は底径が8.4cmの倒卵形をなす壺部である。外面が粗いハケ目、内面は押圧ナデ調整で内底面には強い指頭押圧痕が残る。壺口縁部の11とは直接的には接合しないが、粗いハケ目痕や胎土から同一個体と考えられる。13は底径が6.3cmの壺である。外面はやや細かいタテハケ目、内面は押圧ナデ調整。胎土は粗く、多くの細～石英中砂粒の他にシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は暗赤橙色。

14は口径が4.4cm、復原高が54.2cmの中型壺である。頸部は、倒卵形をなす胴部が緩やかに内摺して窄まった後に短く直口気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。屈曲した頸部下には水平気味の三角凸帯が、胴部下半にはコ字凸帯が1条巡っている。調整は内面が強い押圧ナデ、外面は目幅が3mmの粗いタテハケ目。胎土は細～石英中砂粒を比較的多く含むほかにシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は淡黄橙～淡明黄橙色。

15は上面を残す砥石で、長さは5.4cm、幅は2.9cm、厚さは1.2～1.4cmである。

3. 掘立柱建物 (SB)

掘立柱建物は、すべてで5棟を検出した。分布的には、調査区の南部を中心に拡がって立地している。狭小な調査区が故に確実な規模は明らかではないが、1間×1間、あるいは1間×2間を基本的プランとした建物と考えられるが、大きさに多少の差異が認められる。ピットの中には、柱痕跡を検出したものがあり、これら5棟以外にも建物跡がある可能性が窺える。

24号建物 SB-24 (Fig. 13 PL. 4)

24号建物は、調査区の南西端に位置する1間×2間の建物で、26・27号建物と重複し、26号建物よりも新しい。また、南西の側柱は、しっかりとした柱穴に切られており別の掘立柱建物があった可能性が想起される。現状では梁行長が340cm、桁行長が380cmの東西棟の建物であるが、梁行側に拡がる可能性は否定できない。柱穴は50～65cmの概ね方形プラン呈し、深さは55～58cmで南側の梁柱には直径が20～25cmの柱痕跡がある。床面積は、現状で12.92m²。

25号建物 SB-25 (Fig. 13 PL. 4)

25号建物は、調査区の南東端に位置する1間×1間の東西棟の建物で、2mほど西に位置する26

Tab. 2 掘立柱建物一覧表

造構No	規 模	桁行全長(cm)	桁行柱間(cm)	梁行全長(cm)	梁行柱間(cm)	主軸方位	柱筋	床面積(m ²)	備 考
SB-24	1間×2間	380		340	170-170	N-58.5° - W	南北	12.9	SB-26→SB-24
SB-25	1間×1間	280		220		N-79.5° - W	東西	6.1	
SB-26	1間×1間	260		260		N-78° - W	南北		SB-26→SB-24
SB-27	1間×1間	260		260			東西		
SB-28	1間×1間	330					東西		

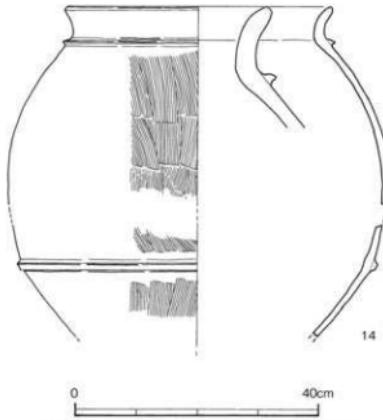


Fig. 12 2号住居出土遺物実測図2(1/8)

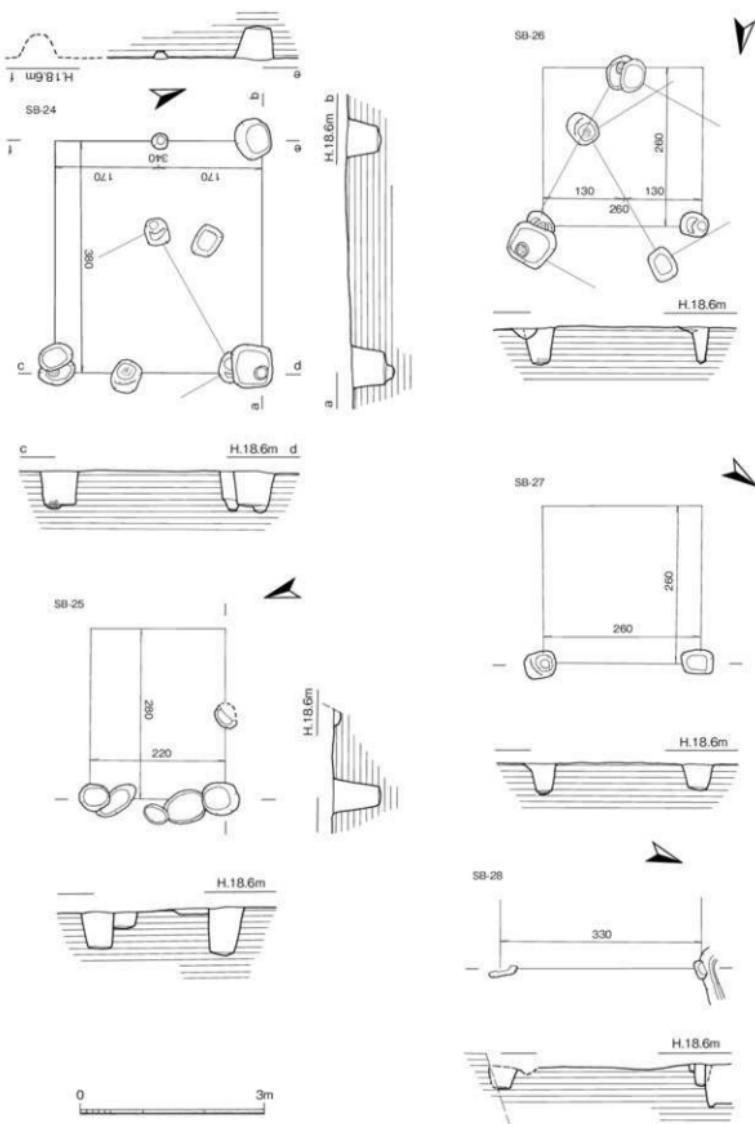


Fig.13 24~28号掘立柱建物実測図(1/80)

号建物と梁柱を直交するように立地している。梁間長は220cmである。南隅柱から140cm東にはやや浅い柱穴があり、柱間の隅柱と考えれば桁行長が280cm、柱間が140cmの2間の1間×2間の建物の可能性が十分に考えられる。柱穴は45～60cmの方形プランをなし、深さは約80cm。床面積は、1間×2間の建物とした場合は6.16m²。

26号建物 SB-26

(Fig. 13 PL. 4)

26号建物は、調査区の南西隅に24・27号建物と重複

して位置する1間×1間以上の南北棟の建物で、南東隅柱は24号建物の柱穴によって削平されている。北側の東西の柱間は260cmで1間×1間の建物とした場合に床面積は6.76m²であるが、南側に桁行が伸びる可能性は十分に考えられる。柱穴は40～50cmの小さめの方形プランを呈し、深さは60～80cmでいずれも東側に小さなフラット面を作る2段掘の構造をなす。

27号建物 SB-27 (Fig. 13 PL. 4)

27号建物は、調査区の南西端に位置する建物で、24・26号建物と重複しているが、その新旧は明らかではない。建物は、東側の梁柱2本を検出したのみで梁行長は260cm、桁行は判然としないが東西棟の建物と考えられる。柱穴は短辺が40～45cm、長辺が60cmの方形プランを呈し、深さは41～49cmで南東隅柱には直径が20cmの柱痕跡が遺存していた。

28号建物 SB-28 (Fig. 13 PL. 4)

28号建物は、調査区の中央にある東西棟の建物で、北東隅柱は2号住居の南西隔壁によって削平されている。建物は、東側の2本の柱穴を検出したのみで全容は明らかでないが、柱間が330cmの梁柱と考えられる。柱穴は、いずれも削平か調査区外に拡がっているが、方形プランをなすものと考えられる。覆土は黒色土の單一層で、深さは33～35cmである。

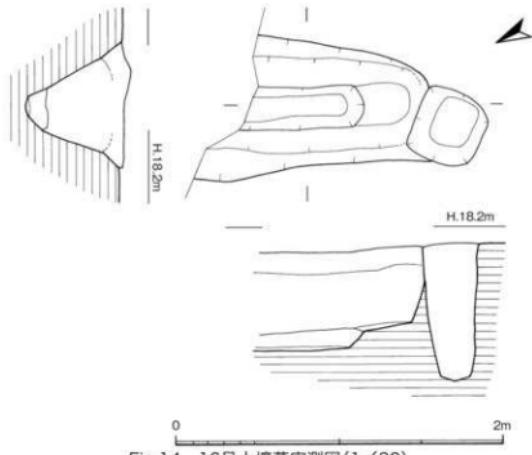


Fig.14 16号土壤墓実測図(1/30)

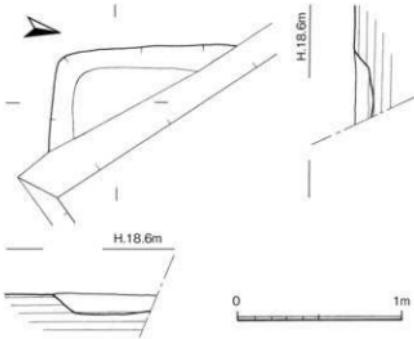


Fig.15 3号土壤実測図(1/30)

4. 土 墓 (S R)

検出した土墓は、1基のみで、その規模や分布的な拡がりは明らかでない。

16号土墓 SR - 16 (Fig. 14 PL. 5)

16号土墓は、調査区の東南部に位置し、南へ2mの距離には25号建物がある。土墓は、南北口壁は柱穴に因る削平を受け、北小口壁は調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、小口幅が55cm、側壁長が180~200cmほどの隅丸長方形プランをなそうか。主軸方位をN-28°-Eにとり、壁面はやや急峻に立ち上がる。北小口壁側の床面は、検出面より50cmほど掘り込んで30cmほどのフラット面を作った後に、更に10cmほど掘り込んだいわゆる2段掘りの構造をなしている。側壁は、小口壁に比べてやや緩やかに立ち上がり、舟底状の断面形をなしている。覆土は、若干量の黄褐色粘土粒と小ブロックを含んだ濃褐色土の單一層である。

5. 土 墓 (S K)

土墳は、1基を検出したが、その大半は調査区外に拡がっており、時期や規模は明らかでない。住居や建物群などと共に集落域の一部をなすものと考えられるが、詳細は不詳である。

3号土墳 SK - 13 (Fig. 15 PL. 5)

3号土墳は、調査区北端部に位置し、すぐ東には1号住居がある。土墳は、西側壁と南小口壁の一部を残して調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、隅丸長方形プランをなすものと考えられる。壁面は緩やかに立ち上がり、墳底は浅い凹レンズ状をなしている。主軸方位は、N-45°-W。覆土は黄褐色粘土粒を含んだ暗黒色土の單一層である。

III. おわりに

第19次調査では、2棟の竪穴住居と5棟の掘立柱建物からなる集落遺構のほかに土墳墓1基と土壙1基を検出した。時期的には、竪穴住居が弥生時代後期に比定される。構造的には、壁面に沿ってベッド状遺構を付設した該期通有の特徴を有している。この2棟の住居は重複しており、一定の時間差が認められる。しかしながら、検出数が最小単位であるが故に集落域の拡がりや消長を十分に把握するまでには至っていないが、近接する第5・9次調査区例などを勘案すると、南八幡丘陵の尾根に沿った南西縁の緩斜面上には、該期の集落域が広く展開していたものと推考される。一方、掘立柱建物は、狭小な調査区に起因してその規模も不確定であり、かつ出土遺物も少ないためにその詳細な時期は定かでないが、28号建物が2号住居に削平されていることに加えて覆土的に大差がないことを勘案すると、住居群に先行あるいは一部並行して構築されていた可能性が考えられ、竪穴住居とともに集落域を構成していた可能性が考えられる。

また、1号住居からは連鉄式銅鑄の鋳型片が出土した。鋳型片は、L字ないしはコ字状にベッド状遺構を付設した竪穴住居の覆土中から検出された。これが直ちに竪穴住居に伴うものとは即断し難いが、諸例からきわめて近い時期と考えて差し支えあるまい。西方の谷を隔てた岡本丘陵から北へ延びる井尻~那珂・比恵丘陵では、須玖水田遺跡や須玖五反田遺跡、井尻遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡などの拠点的集落で青銅器製作を示唆する多くの鋳型や坩堝などが出土している。これに対して雑餉隈丘陵上に占地する各遺跡では1点の出土もなかった。南八幡遺跡第9次調査では竪穴住居から多量のガラス玉が出土しているが、これが直ちに铸造を示唆するものではない。元来、外部から搬入されたものは、砥石への転用が多いことを勘案すると、今次調査で出土した鋳型片は、南八幡遺跡内で消費された可能性が想定されるが、1点の出土をもって直ちに青銅器铸造の証左と断定することも危ぶまれる。ここでは小規模な青銅器铸造の可能性を指摘しながら今後の資料出土を待って再検討したい。

南八幡遺跡第19次調査出土の銅鑄鋳型について

田尻義了 九州大学埋蔵文化財調査室

本資料は銅鑄が表裏に彫り込まれた石英斑岩製の鋳型である。ここではこれまでに出土した銅鑄が彫り込まれた鋳型との比較を通じて、本資料の位置づけを行う。

北部九州において、これまで銅鑄が彫り込まれた鋳型は本資料も含めて11点確認されている(図2・3、表1参照)。本資料以外には福岡市の井戸B遺跡から3点、春日市の須玖岡本遺跡坂本地區から4点、隣接する須玖永田A遺跡から1点、御陵遺跡から1点、筑前町のヒルハタ遺跡から1点の計11点である。ヒルハタ遺跡を除けば、銅鑄が彫り込まれた鋳型は福岡平野内での出土に限られており特徴的な分布を示しているように見える。しかし、福岡平野は鋳型の出土量が他の地域と比べて最も多いことから、様々な製品の鋳型が出土しており(田尻2012)、今後調査が進めば周辺の早良平野や糸島平野などのでも銅鑄鋳型は出土する可能性はある。またこれまでのところ銅鑄が彫り込まれた鋳型の時期は、各報告書によると弥生時代後期から終末期までの時期幅に収まる。

鋳型の多くは転用されたもので、銅鑄のみを当初から製作するために加工したものは少ない。11点の鋳型の内9点が転用、再加工を施している。これは鋳型に使用する石材の希少性や供給量の不安定性を示しており、銅鑄鋳型に限ったことではない(田尻ほか2012)。そのような傾向にあって、井戸B遺跡出土鋳型(2)は銅鑄を1点のみを彫り込み、銅鑄専用の鋳型であることから特異な資料である。また、南八幡遺跡出土鋳型(4)は破片資料であるため詳細は不明であるが、鋳型の厚さを考慮すると当初から銅鑄を彫り込むことを想定して製作した可能性がある。

南八幡遺跡出土鋳型(4)には表裏に銅鑄が彫り込まれている。その他の鋳型で表裏に銅鑄が認められるのは須玖遺跡群坂本地區6次調査出土鋳型(9)である。南八幡遺跡出土鋳型(11)は表裏に銅鑄の上下が逆になっているが、須玖遺跡群坂本地區6次調査出土鋳型(9)は同じ方向である。銅鑄の上下方向に関しては鋳型全体の形状に起因する湯口の付設場所と関係している可能性があり、また表裏の彫り込みに一定程度の時間差を見積もることもできる。現状ではどちらか一方に絞り込むことは出来ず、両者の可能性の指摘に留めておく。

次に本資料が出土した南八幡遺跡における青銅器生産の可能性について周辺の遺跡との関係から考察する。図1は明治33年に作成された南八幡遺跡周辺の地図である。南八幡遺跡周辺の旧地形を読みとると、調査区の西側に線路(現JR九州)があり、その先には高低差3m程度の落差が存在する。低地部には春日市との境界である小河川が流れおり、しばらく西へ行くと春日丘陵の先端に位置する鋳型が多く出土した須玖岡本遺跡坂本地區が所在する。本調査区と須玖岡本遺跡坂本地區までの直線距離は約900mであり、視認距離に十分含まれるが、両者の遺跡間には、先述した小河川が流れしており、低地部を挟んで対面した集落である。明治期でも低地部は水田に利用されている。南八幡遺跡ではこれまで鋳型の出土ではなく、また壇場などの铸造関連遺物も出土していないので、集落内で青銅器生産が行われたとは積極的に評価できないが、須玖遺跡に近いことから鋳型は須玖遺跡から持ち込まれた可能性と、南八幡遺跡において小規模で少量の青銅器生産が行われたという両者の可能性を考えておく。前者の場合、青銅器の鋳型は砥石に転用され、青銅器が製作された場所を離れて出土する場合がよくある。今回出土した鋳型は砥石に加工した面は認められず、前者の可能性は低い。しかし、鋳型が破損した小片であるため全く否定することも出来ない。また、後者の場合は本鋳型が銅鑄を彫り込んでいる点からして可能性がある。須玖遺跡群から離れた集落でも青銅器は製作されるが、その場合小型の製品を少量生産する場合があり、南八幡遺跡でも今後铸造関連遺物が出土すれば、本遺跡

で青銅器の生産を行った可能性が高まる。現状ではこの1点の鉄型の出土をもって十分な判断は出来ないが、今後の調査に期待したい。

(九州大学埋蔵文化財調査室 田尻義了)

【謝辞】

福岡市教育委員会の小林義彦氏には南八幡遺跡第19次調査出土の銅鏡鉄型に関して、実測及びこのような報告記述の執筆機会を与えていただき誠に感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・田尻義了 2012「弥生時代の青銅器生産体制」九州大学出版会
- ・田尻義了・足立達朗・中野伸彦・米村和絃・小山内康人・田中良之 2012「弥生時代北部九州における鉄型石材の原産地同定と鉄型素材の加工と流通」『日本考古学』第33号 p95-p112

【図版出典】

- ・図1の地図は柏書房発行 2001『正式二万分一地形図集成九州』の「博多」を一部改変使用した。
- ・図2・3の鉄型図面は各報告書から引用、一部改変した。

表1 銅鏡鉄型集成表

番号	遺跡名	所在地	銅鏡形式	頭数	連続式の有無	取り込み列数	鉄型の転用の有無	参考文献
1	井尻B遺跡第6次調査	福岡市	範囲あり	2	連続式	1列	転用 鏡→鏡	1
2	井尻B遺跡第6次調査	福岡市	範囲あり	1	単筒式	1列	専用	1
3	井尻B遺跡第14次調査	福岡市		1	連続式	1列	転用 ?→鏡	2
4	南八幡遺跡第19次調査	福岡市		2	連続式	1列?	転用 鏡→鏡	本書
				1	連続式?	1列?		
5	御陵遺跡	春日市		3	連続式	3列	転用 矛→鏡	3
6	須玖永田A遺跡	春日市		0	連続式?	2+α列	専用?	4
7	須玖本遺跡坂本地區3次調査	春日市	四基式	1	単筒式	1列	転用 矛→鏡→?	5
8	須玖本遺跡坂本地區3次調査	春日市		0	連続式?	1列	転用 矛→鏡?	5
9	須玖本遺跡坂本地區6次調査	春日市		49	連続式	7列	武器形→鏡・鏡	6
			範囲あり	8	連続式	2列		
10	須玖本遺跡坂本地區6次調査	春日市	四基式	1	単筒式	1列	転用 連続鏡→筒形鏡	6
				0	連続式	3+α列	器→四基鏡	
11	ヒルハク遺跡	筑前町		2	連続式	1列	転用 小形假鏡→十	7
				1+α	単筒式	2列?	字形銅鏡→銅鏡	
				1	単筒式	1列		

*表中の番号は図2・3と対応している。

表 参考文献

1. 宮井清朗編 1997「井尻B遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第529集
福岡市教育委員会
2. 尾山洋編 2003「井尻B遺跡11」福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集
福岡市教育委員会
3. 平田定一・坂田邦彦編 2004「御陵遺跡」
春日市文化財調査報告書第36集
春日市教育委員会
4. 平田定幸編 2005「須玖永田A遺跡2」
春日市文化財調査報告書第40集
春日市教育委員会
5. 平田定幸・吉田佳広・井上義也編 2011「須玖本遺跡4」
春日市文化財調査報告書第61集
春日市教育委員会
6. 吉田佳広・井上義也編 2012「須玖本遺跡5」
春日市文化財調査報告書第66集
春日市教育委員会
7. 佐藤正義編 2011「ヒルハク遺跡」
筑前町文化財調査報告書第14集
筑前町教育委員会

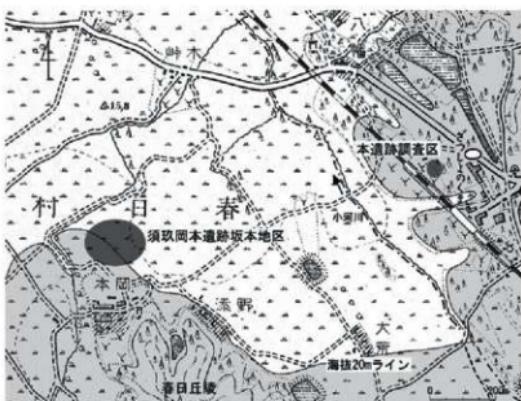


図1 南八幡遺跡周辺地形図 (S=1/10,000)

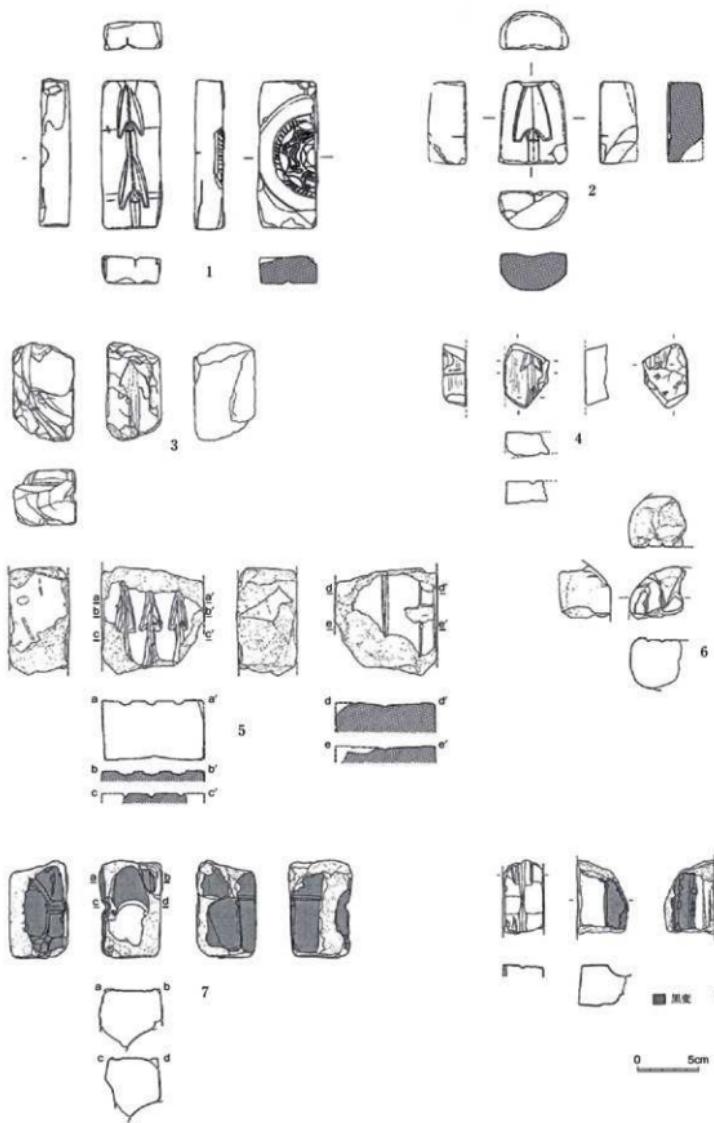


圖2 銅鑄鑄型集成圖1 (S=1/4)

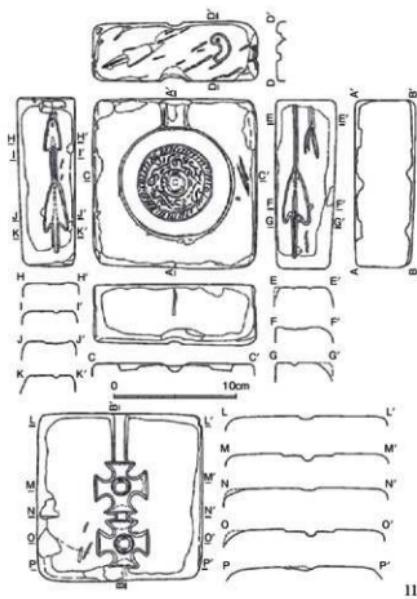
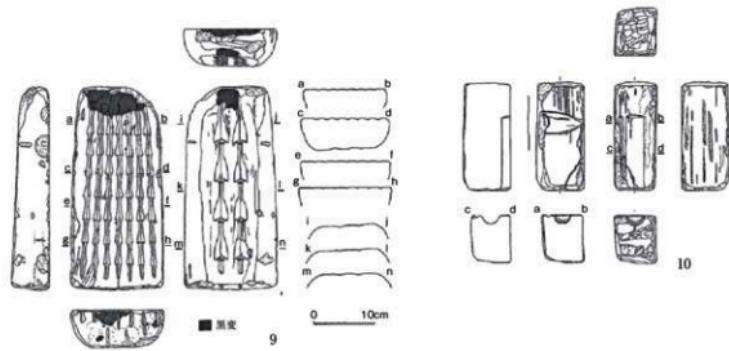


図3 銅鑄錫型集成図2 (9・10:S=1/8 11:S=1/4)

PLATES



1) 調査区全景(東から)CG合成



2) 1・2号住居(東から)CG合成



1) 1号住居全景(北から)



2) 1号住居遺物出土状況(北から)



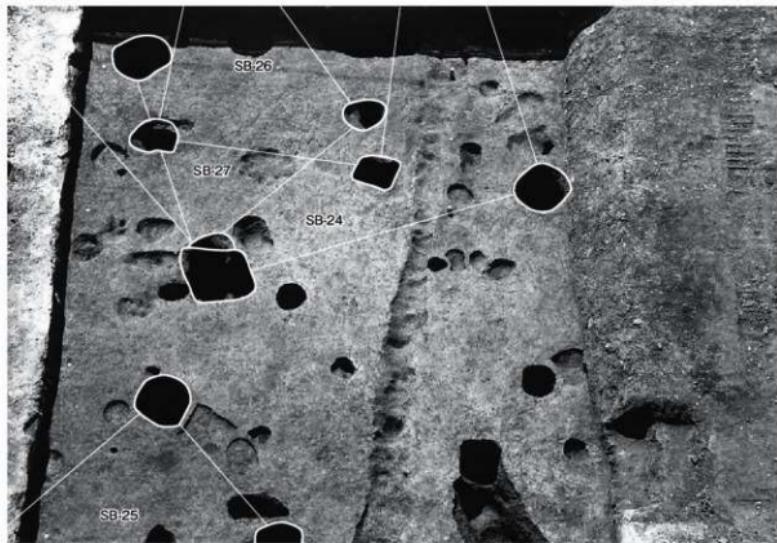
1) 2号住居全景(東から)CG合成



2) 2号住居遺物出土状況(南から)



1) 2号住居遺物出土状況(南から)



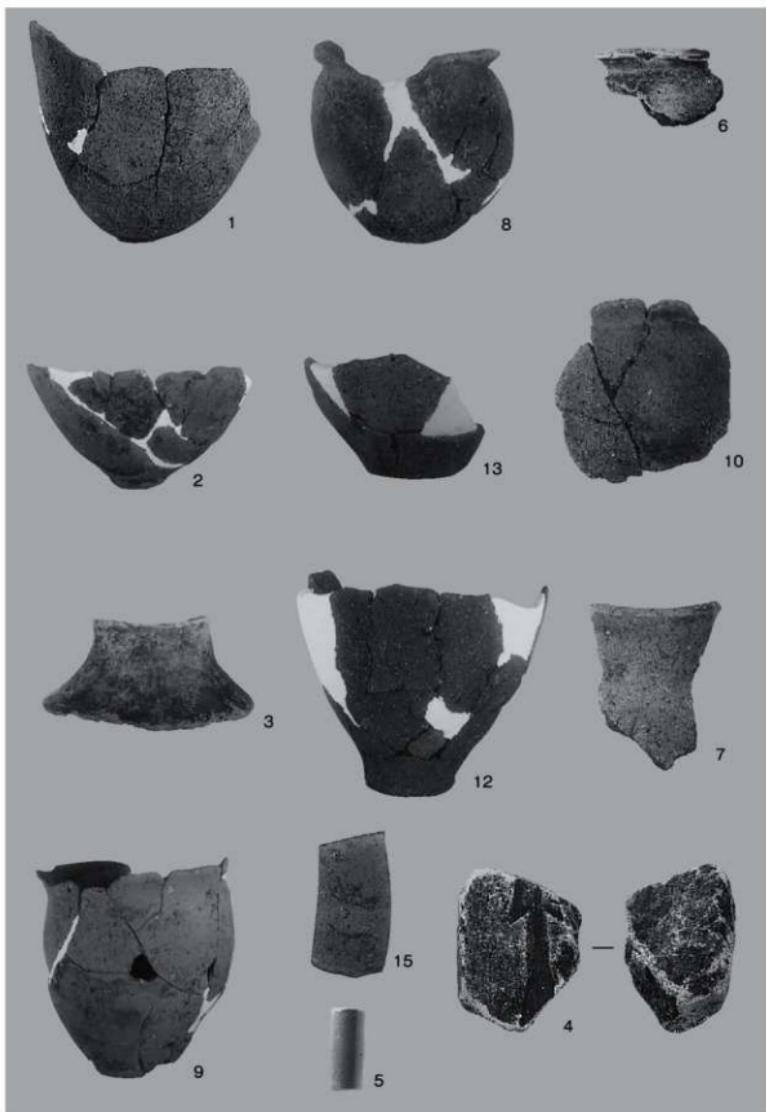
2) 捜立柱建物群(東から)



1) 16号土壤墓(南から)



2) 3号土壤(西から)



出土遺物(縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	みなみはちまんいせき	所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
書名	南八幡遺跡10	市町村	遺跡番号					
副書名	—南八幡遺跡第19次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1207集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 みなみはちまんいせき 南八幡遺跡	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 ことぶきまちのちようめいじん 寿町2丁目1番	40132	51	33° 32' 40"	130° 27' 11"	20110822 ～ 20110916	113m ² 記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
南八幡遺跡 第19次	集落	弥生時代	竪穴住居 建物 土塁	弥生土器 管玉 銅礫 菱型	竪穴住居より銅礫の 菱型片が出土			
要約	南八幡遺跡は、御笠川の中流域西岸の南北に位置する。この難削開丘段は、侵入する開谷谷によって六つの丘陵に分かれ、その丘陵上には遠からえ野八幡跡、麦野田遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、難削開丘段の南西端に位置する。東は麦野C遺跡と南は難削開丘段と開所谷を隔てて対峙している。第19次調査区は、この南八幡遺跡西縁部の傾斜面上に位置し、220m南東には弥生時代後期の竪穴住居から多くのガラス玉が出土した第6次調査区がある。今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居2棟と竪穴建物5棟の他に土塼跡1基、土塁1基を検出した。このうち1字あるいは2字表記にペッド状遺構を付設した竪穴住居から銅礫の菱型片が出土した。菱型片には表面に溝造式の彫が、また裏面にも彫が彫り込まれている。一方、側面には鑄造時の印と考えられる一筋の縦刻がある。この菱型片の出土は、難削開丘段上に立地する遺跡では初例であり、この丘陵上で青銅器の鑄造が行われていた可能性を示唆するものである。							

南八幡遺跡10

—南八幡遺跡第19次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告第1207集

2013年(平成25年)3月22日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 田中印刷
福岡市西区大学飯氏947-2